

この言葉(2)

私の同志は私だけです。

これは映画『インド夜想曲』で広く知られたイタリアの作家アントニオ・タブッキの著書『供述によるとペレイラは・・・』(須賀敦子訳、白水社刊)の中の言葉である。

時代は1938年夏、舞台はリスボンでの出来事が、主人公ペレイラの供述という形で語られる。この年、ヒットラーがオーストリアを併合し、その前年、スペインでは自由を求める人民戦線政府をフランコ派の軍隊がイタリアのファシストとナチス・ドイツの支援を受けて力で圧制しようとするスペイン内戦が勃発している。フランコ軍を支持したドイツ軍の爆撃でゲルニカの村が壊滅したのも同年の出来事だった。

右翼勢力が票を伸ばす1994年のイタリアで、タブッキは60年前、独裁政権下にあったポルトガルのリスボンを舞台にこの作品を書いた。私たちにとってもきわめて今日的なテーマと言えるだろう。ストーリー・テラーとしての才能を十分に発揮した、ミステリータッチの本作は読み手の興味を最後まで離さない。

日刊紙『リシュボア』(リスボン)の文芸面編集長の職を任されたペレイラはなぜか「死について考えていた」という書き出しで小説は始まる。その後、偶然知り合った青年を契約記者として雇い、近いうちに亡くなりそうな作家の追悼記事を書く仕事を与えた。『リシュボア』紙は政治色ぬきで無党派を旗印としている新聞だ。それなのに青年が書いてくる追悼記事はどれも政治的で、煽情的な原稿で、とても「つかいものにならない。」それなら早く首にすればよさそうなものだが、ペレイラはそうせず、迷惑だと思いつつも、一文無しだという青年に金を渡したり、食事をさせたり、従兄だと紹介された青年をかくまう手伝いをしたりする。そのたびに彼は「なぜあんなことをしたのだろう。」「なぜあんなことを言ったのだろう。」「どんな理由があったのだろう。」「何も考えつかない」と繰り返している。

ペレイラはカトリックだが、さぼって教会にはいかない。数年前に妻を亡くし、子供もいない独り暮らしで、毎日妻の写真に一日の出来事を報告するのが日課になっている。肥満で、汗かきで戒厳令下にある街の行きつけのカフェで、香草入りオムレツと砂糖入りのレモネードを何杯も飲むのを楽しみにしている、ごく平凡な市民の一人にすぎない。その彼が、自分でも説明できない力によって政治に巻き込まれていく。小説中に伏線は用意されている。

列車の中で知り合ったあるユダヤ人女性と彼との会話。「ぼくだって、現在のポルトガルで起きていることを、よろこんではいませんよ。ペレイラは認めた。デルカド夫人はミネラル・ウォーターをひと口飲んでから、いった。じゃあ、なにかなさればいいのに。なに

を、どうするんですか。ペレイラがいった。そうですね。デルカド夫人がいった。あなたは知識人でいらっしゃるから、いまヨーロッパでなにが起きているかをはっきりおっしゃればいいのかしら。自由な、あなたのお考えを表明なされればいいのです。なにかなされればいいんですわ。」

やがて、ペレイラが大した意志も持たず、成り行きに任せて付き合っている契約記者の青年や彼の女友達、従兄らが「まずいことに首をつっこんでいるらしい」ことにうすうす気づくが、この時点でも彼は「ぼくには関係のないことだけどね」と妻の写真に語りかけている。その彼が海洋療法に出かけた施設で担当医となったカルドーソ医師との出会いが、やがてペレイラの内面に巣くう何ものかを表面化させたと言えるだろう。

「大事なのは、私が疑いはじめたことです。もし、ふたりの若者がただしかったら、と思って。それならきっと、彼らがただしいのでしょう。カルドーソ医師はおちつきはらっていった。ただしいか、ただしくないか、それを決めるのは歴史ですよ。」

「ペレイラさん、もし、あなたのおっしゃる若者たちのやっていることが正しいと思えて来たら、そして、あなたの人生がこれまでなんの役にも立っていなかったと思えるなら、それもいいでしょう。これからは、ごじぶんの人生がこれまでのように役立たずとは思わなくなるはずです。もし、あなたの主導的エゴのいうなりになる気持ちがおありなら。そして、その苦しみを、食物や、砂糖をいっぱい入れたレモネードに代行させないように。」

ペレイラは政治的中立をモットーとする『リシュボア』紙にフランス人作家アルフォンス・ドーデの『月曜物語』の中から『最後の授業』を訳そうと考えるようになる。「フランスばんざい」で終わるこの作品は反ドイツをテーマにしたもので、犯罪防止委員会の検閲に引っかかるだろうし、自分の主導的エゴを助けてやりたいのなら、この国を出た方が良さだろうと、カルドーソ医師はアドバイスする。そして、次にペレイラはブラジルへの亡命を余儀なくされたカトリック作家ベルナノスの『田舎司祭の日記』から数章をポルトガル語に訳して掲載しようと思いつく。こうしてペレイラはこの大変な時代に自分の選択に従って行動することの大切さを身をもって示していくことになる。しかし、そのような状況に置かれても、彼はまだ自身の行動の理由が分からない、と言い続ける。それは、現代の私たちにも言えることではないだろうか。確かに自分の中には何かがある。それゆえ、社会の由々しき問題に反応するのだ。しかし、それが確固たる政治思想であるとか、政党的立場に根差しているのではない場合、私たちには「個」しかありえない。「私の同志は私だけです。」

小説は急転直下、あわただしく結末に進んでいく。それは予想されるものではあったが、その後、ペレイラがとった行動は読み手に大いなる共感を抱かせる。ペレイラは新たな生き方を毅然として選ぶ。カルドーソ医師が言った言葉「過去とつきあうのは、もうおやめなさい。未来とつきあってごらんなさい」の実践者として。

2017年3月30日 扇千恵記

